

◆黄烏瓜その後——前号に詠った我が家の黄烏瓜は雄株だったらしく、実ることもなく秋の深まりとともに枯れ果てた。今は高さ二・五メートルの南天の木に、黄土色に枯れた直径三ミリほどの蔓（茎）だけが切れ切れにからまつている。来年は雌株の黄熟の実に出会いたい。それにつけても赤い実の烏瓜を見たことがない。山形県内にあるのだろうか。烏瓜の花は黄烏瓜に似た白いレースの花のようだが、夜に咲いて朝方には萎れるという。いつか「熟れた真つ赤な烏瓜」を見て詠いたいものだ。

梅津純子

◆十月の中下旬に、同居する子と時間差でコロナに感染した。外出自粛をし、人と距離をとり、手指を消毒し、といろいろ注意し、ワクチン接種も数を打っていたところ、今さらとか、なんで、とかいう気分もあった。子の数日後に発熱した。そこまでの緊張感は息苦しいほどだったが、じぶんも感染したことで、むしろ気が楽になり、以降仲良く世話をしあうことになった。やさしくもしてもらった。発熱期間はほぼ三日、ともに咳が残ったが、じぶんには臭覚がなくなった、ほてり、な

ども残った。味噌汁に味噌の匂いがしない、コーヒーに香りが無い、洗濯物の汚れ具合が匂いからはわからない、など引き算の生活である。臭覚は、三週間後になんとか戻ってきたが、いずれにしても、感染したことで、何か一区切りというか、一段落というかした感じがしたのが不思議だ。子と二人でのり越えた感じもある。

小野澤繁雄

◆凄まじい暑さのお陰で、農作物の出来が非常に悪かった。秘伝豆などは収量がほぼ半分。白菜、青菜も不出来で、砲弾のようになるはずの白菜は、未だにザゼンソウくらいの大きさで玉にもなっていない。遅くまで暑さが続いていたせいも、本当に出来が悪かった。でも玉にならない白菜にも楽しみがある。冬を越して春になれば臺が立って美味しい莖立になるのだ。来年は呆れるほどの莖立が食卓に並ぶかもしれない。「ためいき啜の出る畑仕事小六月」

神村ふじを

◆年齢とともに時のたつのが早く感じられます。二〇二三年はことさら早かったように思います。志した成果は皆無でしたが、生命を保ち負傷を癒せたことには感謝しなければなりません。「展景」には編集部の励ましを頂き、復帰することができました。お陰で結社誌への出詠も叶えられ、歌づくりが続けられています。急がず転ばず何事にも用心ファーストで歩んでまいります。

河村郁子

◆イスラエル軍によるガザの人々の虐殺が続いている。十月七日以降の新聞は、見出しも写真も残酷すぎて正視することができない。イスラエルは正々堂々とパレスチナへの蛮行を繰り返している。怒りが込み上げる毎日だ。最近読んだ文章の中で、「世界」二〇二三年三月号の「『人権の彼岸』から世界を観る」（岡真理 著）が最も印象深い。「この一年、ロシアの侵略に対する非難とウクライナの人々に対する共感がメディアに溢れ、平和学習がとにかくに興隆した。かたや中東のメディアに溢れるのは、欧米諸国の二重基準に対する批判だ。侵略を非難し、その犠牲者に共感するのは正しいが、平和を唱えながらこの二重基準の問題を等閑視することは、平和よりむしろその破壊を援けるものである」と論考は続く。欧州ではウクライナ難民は受け入れるがシリア難民は拒絶、というように人種差別は植民地主義の時代と変わらない。メディアはガザでの大規模な攻撃があった時しか報道しない。日本のほとんどのメディアも欧米に右ならえなのは嘆かわしい。プーチンを悪者にするのなら、欧米の二重基準も同じくらい問題にしなければならぬと、岡さんは主張する。その通りだと思う。今も世界のどこかで蔑まれた民衆が蹂躪されている。私たちに何ができるのか、途方に暮れるこの頃だ。

新野祐子

編集後記

◆イスラエルのガザ攻撃に怒っていたら、日本の二〇二四年はたいへんな幕開けとなった。一日は能登半島で大地震、二日には羽田空港で日本航空と海上保安庁の航空機同士の衝突事故。ニュースを追うだけで精一杯。気持ちが付いていかない。能登の地震では当初、七尾市にいる知人の安否がわからなかった。四日になって、ケータイも何も持たず近くの高校に避難していることが確認できた。が、なんともこの寒空が恨めしい。

能登半島には志賀原^{しか}発があり、そちらも気になっていた。北陸電力は正確な情報を出さず、小出しに訂正している。やはり不具合が出ており、津波も来ていたのだ。元京都大学原子炉実験所助教の小出裕章さんへのインタビュー記事を紹介したい。

「小出裕章が語る能登地震と原発」

<https://note.com/kuwa589/n/nf745c45cb244>

この災害のあとに政府が何をもち出すか、気をつけたほうがよさそうだ。110号の新野祐子さんの次の句が、いみじくも警告を発している。ショック・ドクトリンとは、社会に壊滅的な惨事が発生した直後に、人々が茫然自失している時をチャンスと捉えて巧妙に利用する政策手法だという。